

エリアウェット

峡東教育事務所
 地域教育支援スタッフ
 TEL 0553-20-2731
 FAX 0553-20-2733



山梨市三富の滝

11月21日(木) 笛吹市のいちのみや桃の里ふれあい文化館において、峡東地域教育推進連絡協議会主催の「人権のための講演会」が開催されました。当日は峡東地域の保幼、小中学校、高校、児童館、支援センターはもとより、県内各地から190名の方々の参加がありました。以下に講演の内容を一部掲載します。

「子ども虐待」とは

「虐待」という言葉から何をイメージするのか。それぞれ持っているイメージは違う。虐待の原語は「child abuse」である。「child abuse」を直訳すると「子ども乱用」になる。この場合の「乱用」とは、子どもの存在や子どもとの関係を利用して大人が何か(物理的利得、心理的利得)を得ることである。子どもを乱用すること、虐待することで、親が自分の精神的なバランスや生活のバランスをとっている。子どもに暴力を振るいつつ、子どもを手放すことができない大人たちがいるのが現状である。

虐待・ネグレクトとトラウマ、アタッチメント

虐待はトラウマ性体験である。トラウマとは心の傷がより発展した状態で、自分ひとりの力やパーソナルなリソースを使っても癒えることがないより深刻な状態をトラウマと呼ぶ。それより深刻なのがネグレクトである。子どもにとって必要なケアを保護者がしないこと。特に情緒的なネグレクトの『見捨てられ体験』は、子どもに心理的影響を与える。虐待とネグレクトを併せて、不適切な養育環境といい、この環境で育つことによって、アタッチメントの形成不全が起こる。アタッチメントとは、子どもが養育者に対して形成する情緒的な結びつきである。アタッチメント関連障害は、反社会性傾向、ADHD 様状態、アスペルガー類似状態に発展する。現在の社会的養護(児童養護施設、里親養育)は、トラウマ-アタッチメントの問題にはセンシティブではなく、子どもは十分な支援がされずに巣立っていく。社会的養護の『個別化』、『小規模化』を支える心理的支援のあり方の模索が必要である。



カラー版をご覧ください

『エリアウェット』はカラー版を峡東教育事務所のホームページに掲載中です。右のQRコードをスマホのカメラから読み取り、ホームページを開いて下さい。是非ご覧ください。



エリアウェット
ホームページ

ホームページアドレス

<https://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-hym/chiiki/areaweb.html>

ご意見をお寄せください

◎『エリアウェット』のご意見・ご感想・取材情報をスタッフ一同お待ちしております。右のQRコードをスマホのカメラから読み取り、メールでご連絡いただくか、表紙右上の連絡先にご連絡下さい。



E-mail アドレス

kyoiku-hym@pref.yamanashi.lg.jp

お問い合わせ

慢性的トラウマ体験の子どもへの影響

今日の子どものにとって最も頻度の高いトラウマ性体験は虐待やネグレクトなどの不適切な養育である。トラウマ性体験をもたらす不適切な養育は事故や災害よりも頻度が高い。例えば PTSD の症状は阪神淡路大震災のような短い時間の体験から起こる。これに対して虐待やネグレクトは慢性的な体験であり、脳の発達やさまざまなレベルの発達に影響を与える。



虐待・ネグレクトが子どもに与える心理的影響をとらえる基本的視点

虐待やネグレクトを受けた子どもたちを見るときに、対人関係や自己調節能力が備わっているか見てほしい。第1の特徴は、虐待を受けた子どもたちは、無意識のうちに挑発的に関わり大人から怒りや暴力を引き出す。虐待的人間関係の再現性が見られる。第2の特徴は、初めて会った大人に誰彼無しにベタベタする無差別的愛着傾向や親密な人間関係の回避傾向といったアタッチメント関連障害に起因する対人関係様式が見られる。それから、力による支配された環境で育った子どもは力関係に敏感になり、対等な人間関係を楽しむことができなくなる。虐待が与える心理的影響として大きいのは自己調節能力が育たないことで、自分で自分をコントロールすることができないことが、虐待の非常に重大な影響である。

自己調節障害としての理解

自己調節能力というのは、生理的機能である体温、睡眠、摂食、排泄などから行動の調節といったさまざまなレベルで、自分が乱れた状態になったときに元の状態に戻る力である。しかし、自己調節障害があるということは、このような力が育まれていない。前記の能力の欠如はもちろん、間歇性爆発性障害、不快感の調節障害・自傷行為、興奮の鎮静化の困難が起こる。行動の調節という点では、注意を向けることや衝動性が調節できない。周りから見ると ADHD そっくりに見える。元来 ADHD は持って生まれたもので、この場合は養育環境で生まれてくるもので ADHD とそっくりの状況になる（反応性 ADHD）。

自己調節障害の精神病理

赤ちゃんの頃には自己調節能力がないので、泣いて不快な状態を人に知らせる。2歳位までの幼児も同様である。そこで必要なのは、大人からの刺激（聴覚的刺激、視覚的刺激、身体への刺激、体感への刺激）である。刺激が上手くフィットして刺激を手掛かりに赤ちゃんは、不快な状態から快への回復が起こる。3歳くらいから自己調節能力の芽が生まれる。自力で快な状態へと戻ろうと努力するエピソードが見られる。こうなるためには生後直後から開始される養育者の調節への援助が必要である。虐待を受けた子は、親が援助するような経験をしていないので自己調節機能が育たない。「しつけ」とは、元来赤ちゃんや子どもが不安定な状態になったときに関わって安定を回復するための手伝いを「しつけ」と言っていた。今のように子どもに対して指導したり、教えたりすることを「しつけ」とは言っていなかった。「しつけ」に体罰が許されるというのは、本来の日本のしつけではない。

アタッチメント（愛着）とは

子どもは怖くなったり、心配になったり、痛くなったり、自分が不安定になると大人に対して接近、接触する。そのことで、子どもは安心感を回復するという機能を持った行動をアタッチメント行動という。アタッチメントというのが、多分幼児期の養育では最も重要な精神的装置である。第1段階として、子どもが不安になったら大人に対して安心感を求めて、接近、接触をする。第2段階として、自分が困ったときには親が助けてくれるとゆうような心の中でモデルを作る（内的ワーキングモデル）。アタッチメントがしっかり形成されている子は、大人との関係を利用して自分を整え、立て直すことができる。アタッチメントが十分に形成されていない子は、それができずに不安定な状態を引きずってしまう。

アタッチメントに関する発達心理学的研究

アタッチメントスタイルは3群に分類される。B型（安定型）は自分が不安だったら親に頼って安定性が回復できる。それに対して、A型（回避型）は、不安になっても親のところに行けない子どもたちであり、C型（両価型）は、親に頼ることはできるが、なかなか回復せずに、ずっとしがみつけばなしである。

未組織型アタッチメント（Dタイプ）

虐待を受けた子どもたちを同じように分類しようとしたができなかった。里親家庭で養育されている子どもを分類対照にしたら全然違う行動パターンが出てきた。そこでD型（未組織型）という新たな分類を作った。一般家庭の子どもと虐待を受けて里親家庭で育てている子どもとはアタッチメントスタイルが全く別のものになっている。多くの研究者は、D型と分類された子どもたちは、精神病の発症率が高まるのではないかという推測をしている。乳幼児期の養育で最も大事なことは健康的なアタッチメントの形成である。

虐待・ネグレクトとアタッチメント

どうして虐待・ネグレクトでアタッチメントに問題が生じるのかというと、虐待の場合、親は子どもに安心感を提供するどころか、恐怖心を提供しているからだ。ネグレクトの場合は、自分が不安になっても親が反応して

くれない。ゆえにアタッチメントの形成不全が起こる。アメリカの疫学研究で、過剰な社交性を持っている幼児期の子は反応性アタッチメント障害と診断される。その子どもたちが、小学校にあがると ADHD と診断名が変わる。ADHD は育ちに関係ないはずである。ゆえに、この子どもたちの幼児期の診断名が反応性アタッチメント障害であれば虐待やネグレクトを受けているので、この ADHD の状態はおそらく持って生まれたものではなく、環境に起因するものであると考えられる。そういう子どもたちが小学校の高学年になると素行障害（非行）という診断、大人になると反社会性人格障害という診断になる。素行障害とか反社会性人格障害の人は、罪悪感の欠如という精神的な問題を抱えている。「痛み」を感じていないから繰り返してしまう。

アタッチメントと高機能広汎性発達障害（アスペルガー障害）

どうしてアタッチメントが形成されていないと罪悪感が作られないのかということ、論理的な仮説だが共感性（共感的関心、他者視点、共感的苦痛の3つの要素からなる）が形成されないからだ。ここでアタッチメントの第3段階として、目標修正的パートナーシップの形成を理解する必要がある。第3段階は、学校で嫌なことがあって家に帰ったら親に話を聞いてもらおうとした（内的ワーキングモデル）のに家に帰ったら親がいなかった。その時に、目標修正的パートナーシップの形成されていない子は、無目的に家の周りを、親を求めて探し回るかもしれない。これに対して目標修正的パートナーシップの形成されている子どもは、一旦はパニックになるかもしれないが、時間を見て親がどこで何をしているかわかり、そこへ行って親に会うといった目標修正をすることができる。これを他者視点という。他者視点がなぜ重要なのかということ、他者視点は共感性の中核にあるからだ。アタッチメントが形成されていると他者視点が形成されるということになる。アスペルガーの子どもたちは、かつて他者視点がないといわれていた。アタッチメントが形成されていないと他者視点が獲得できていない。すると共感性に欠ける。共感性に欠けるので罪悪感が持てない。すると犯罪傾向が生じる。その可能性が高まるのと共に他者視点が持てないのでアスペルガーと診断されてしまう可能性も高まる。

「発達障害」に関する問題意識

発達障害について考え直してほしい。そもそも発達の障害とはどういうことなのか。過剰診断されているのでは。以前の文科省の調査で、学校では6. 数%の子どもが何らかの発達障害に該当する。病気で6%もあれば、それは病気ではない。6%有病率があれば、それは多様性の問題でそういうタイプの人がいると考えた方がいい。ADHD と診断された子どもの80%が不適切な養育をうけていたという報告もアメリカにはある。幼児期に反応性アタッチメント障害に該当していた子が思春期以降にアスペルガー障害と診断されることはよくあることで、アタッチメントとアスペルガーの状態というのは関連していると思っている。

地域の課題

ご存じの通り市町村が虐待問題の通告窓口になっている。それは児童相談所だけでは対応できないという現状があったからだ。児童相談所を責めるだけでは何の解決にもならない。児童相談所には、子どもを守る機能と親を支援する機能があるが、親の意向のもとにいろいろケースを進めていくのが基本スタイルとなっている。その結果子どもの危険な状態を見落とししてしまう。民間の力もあわせて、市町村の支援機能の強化とそれを可能にする体制整備をしていかなければならない。児童相談所の子ども保護機能強化と基礎自治体の家族支援機能の強化という方向性（2016 児童福祉法改正）が出されているが、市町村の専門性をどのように高めるかが課題だ。専門職を雇えるだけの耐力をつけなければならない。社会文化的に言うと「子育ての私事化」から「地域による子育て」へもう一度戻さなければいけない。そもそも人間は共同繁殖だった。地域の大人がいないと子どもを育てることができなかった。地域による子育ての徹底追及が大切で、「子育て支援」から「子育て支援」へ変えた方が、つまり地域が直接子どもを育てるという仕組みづくりをした方がいいのではないか。

学校の役割を考える

学校の役割として、親に代わるアタッチメント対象は学校の先生だ。子どものアタッチメント対象に親に代わってなるという可能性は常に意識しなければいけない。特にネグレクトのケースではそうだと思う。学校の先生たち自身が、アタッチメント対象になれるか、なるためにはどうゆうふうに関わればいいのか考える必要がある。先生は、子どもに安心感を与える存在である必要がある。Trauma-informed education というのは、その子にトラウマがあるということを念頭に置いた上でその子に関わることを Trauma-informed と言うが、教育もそれを試してみることは可能かもしれない。また、子どもの学力保障をどうするかという問題もある。虐待やネグレクトを受けている子どもたちは、学力低下を起こしている。教育関係の人たちは「学力診断」をしてほしい。学力を支えている力のどの部分が抜けているか学力診断をアセスメントしてほしいことを教育の専門家に求めたい。また、我々は子どもたちの支援はそれぞれのニーズに応じて個別化している。学校教育にも個別化はあり得るのか。諸外国では10人学級で同じ教室で、算数でも違う問題に取り組んでいる。

福祉における臨床経験から、的外れである可能性もあると思うが、教育が個別化していったら、子どもたちの学力保証がされ、学校で先生がアタッチメント対象になってくれれば子どもたちはすごく救われると思っている。

ふれあいフェスタ笛吹

すばらしい快晴のもと11月2日(土)に地域の秋の風物詩であるフェスタ笛吹が開催されました。会場には、多くの人が集まり、オープン1時間前の午前9時には開門を待つ人の長蛇の列ができました。ご近所の方や卒業生、小さな子どもの親子連れ、ことぶき勸学院の峡東教室の方など来場者も様々でした。販売は、生徒たちが中心となって、朝早くから準備を進め、これに先生方やPTAの方々も加わり、10時の販売開始の放送とともに、一斉に始まりました。生徒たちは、心を込

めて育てた野菜や果物、花を、あるいは工夫を凝らして調理したパン、ビスケット、ジャム、味噌などを、明るく爽やかに誠実な接客で販売していました。また、軽食も特設フードコートで販売され、来校者は、おでんや焼きそば、カレー、うどんなどに舌鼓を打っていました。他にもバンド、太鼓、呈茶、輪投げ、ボーリングなどのアトラクションもフェスタを大いに盛り上げていました。生徒達にとっては地域の人々と交流する学びの場となったとともに、活気に満ちたふれあいの場ともなりました。



山梨県立笛吹高校

高校生のインターンシップ

インターンシップとは、生徒が職業現場において実際に仕事を体験することです。地域の産業や経済社会に直接触れることで実社会における実際の知識や技術を学んだり、学校の学習と結びつけて考えたりすることなどを目的に実施されています。笛吹高校では、1年生全員がインターンシップに取り組んでいます。今年度も、11月12日(火)、13日(水)、14日(木)の3日間実施され、製造業や小売業、保育施設、博物館などの事業所へ赴き、それぞれの職場で実際に仕事を体験し、将来の進路を考えたり、コミュニケーション能力の向上や責任感を高めることにつながる機会となりました。

今年度も、11月12日(火)、13日(水)、14日(木)の3日間実施され、製造業や小売業、保育施設、博物館などの事業所へ赴き、それぞれの職場で実際に仕事を体験し、将来の進路を考えたり、コミュニケーション能力の向上や責任感を高めることにつながる機会となりました。



山梨県立笛吹高校

学校を花で飾ろうプロジェクト

11月19日(火) 笛吹高校果樹園芸科の3年生7名と一宮中学校1年生90名全員の手によりピオラの植栽作業が行われました。1回目は6月に行われ、今年度2回目の作業となります。6月に植えたペコニアは、植え替えるのがもったいないほど沢山の花を咲かせており、笛吹高校の先生から「手入れが良い証拠ですね」との言葉をいただきました。整備美化委員会を中心に水やりを絶やさず、日の当たる場所へ移動させたりした証です。

今日は、植えたピオラは、厳しい寒さを乗り越え、3月には卒業式、4月の入学式の会場を、さらには、笛吹市桃の里マラソン大会の沿道を華やかに飾ってくれることでしょう。花を大切に育てる優しい心は、きっとこれからの生活の中にも豊かさをもたらすことと思います。

今日は、植えたピオラは、厳しい寒さを乗り越え、3月には卒業式、4月の入学式の会場を、さらには、笛吹市桃の里マラソン大会の沿道を華やかに飾ってくれることでしょう。花を大切に育てる優しい心は、きっとこれからの生活の中にも豊かさをもたらすことと思います。



笛吹市立一宮中学校

チームライフル競技体験

11月11日(月)に山梨県立ろう学校でオリンピック・パラリンピック教育推進事業の一環でチームライフル競技体験が行われました。この事業は2020年の東京オリンピック・パラリンピックへの児童生徒の関心を高めるとともに、スポーツの価値、国際・異文化、共生社会、障害者への理解を深めるためにスポーツ庁の委託事業として全国各地で実施されています。当日、小学部・中学部・高等部の児童生徒25名が体育館に集まり、山梨県ライフル協会、笛吹高校ライフル射撃部の顧問の先生や生徒の指導の下、チームライフルに挑戦

しました。はじめは照準を合わせるのが難しそうでしたが、すぐにコツをつかんで楽しそうに撃っていました。最後に、チーム対抗戦も行われ、高得点が出ると歓声をあげていました。児童生徒同士の交流では、全員でダンスを踊ったり、チーム内で自己紹介や学校生活について話したり、チームライフル競技を行った感想を発表し合い友好を深めていました。



山梨県立ろう学校

ほかほか祭

笛吹市立芦川小学校

11月9日(土) 芦川小学校の体育館で「ほかほか祭」が笛吹市社会福祉協議会や都留文科大学のボランティア、地域の方々はもちろん、芦川町にゆかりのある方々の協力のもと開催されました。オープニングでは、芦川小の5名の在校生による和太鼓の「すずらんばやし」が披露されました。学習発表では「芦川の川について」と題して、上流から下流までの石の特徴や魚や植物の変化について発表がありました。太鼓は迫力があり、学習発表は、河原の石は下流に行くにつれて角がとれて丸みを帯びるなど、自然の摂理をよく捉えており素晴らしい内容でした。学習発表



表の後は「あしがわコロコロリング」や「あしがわシューティング」といったゲームで楽しんだり、キッズやつしろのブースで「のぼるカード」や「プープーふうせん」の作成に取り組みました。お昼には、味噌田楽やほうとう、焼き芋といった料理も参加者全員に振る舞われ、参加者同士の会話も弾み和やかな雰囲気を感じられました。最後に参加者全員で記念撮影を行い、盛況のうちに今年のほかほか祭は終わりました。



笛川小こどもまつり

山梨市立笛川小学校

11月22日(金)に笛川小学校体育館で「笛川こどもまつり」が開催され、保護者、地域住民など多くの参加者で賑わいました。この行事は、児童が6つの縦割り班に分かれ、それぞれの班が作った創造的なゲームを楽しむことができます。ゲームには、ペットボトルをもぐらにした「もぐらたたき」や「たたいてかぶってジャンケンポン」などおなじみのものから、アイマスクをかけ、iPadからイヤホンで音を聞きながら、手を引かれてコースを歩き恐怖を体験できる新感覚の「おばけやしき」と



いったアトラクションまでありました。また、読み聞かせボランティア「本楽隊」による絵本カルタのコーナーもまつりを盛り上げていました。この行事は毎年開催され、子どもたちが普段とは違った異年齢集団で活動したり、地域の方々と交流することで人間性を成長させるよい場となっています。



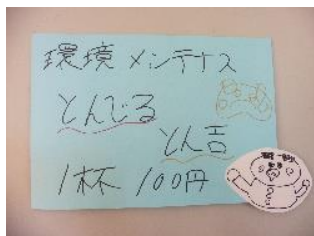
桃花ダイスキマーケット秋の大収穫祭

山梨県立高等支援学校桃花台学園

11月16日(土)に桃花台学園で、秋晴れのもと多くの保護者や地域住民が訪れ桃花ダイスキマーケット「秋の大収穫祭」が開催されました。来校者は、まず体育館で行われたオープニングセレモニーで、太鼓部の勇壮な演奏に出迎えられました。今年度は、農業生産コースが白菜、大根など無農薬の安心野菜の販売、環境メンテナンスコースが花の苗や豚汁の販売、食品加工コースがおなじみのパンやピザ、焼き菓子の販売を行いました。PTAも焼きそばとフランクフルトの店を出店させ、祭りを盛り上げていました。



どの店も商品を買求める長蛇の列がいつまでも続き、焼き芋など、あっという間になくなる商品もあり大盛況でした。もちろん、桃カフェも営業し、買い物を終えた来校者がカップケーキを食べたり、飲み物を片手につろいでいました。生徒が自ら作った野菜や食べ物を販売するなど自主的に運営しているのはもちろん、ポップコーンの作り方を来校者に説明している姿をみて、就労に対する意欲や理解の向上に繋がっていると感じました。



学園祭「産技祭」

山梨県立産業技術短期大学校

11月2日(土)に産業技術短期大学校塩山キャンパスにおいて学園祭「産技祭」が開催されました。当日はオープニングセレモニーで幕を開け、クラス対抗パフォーマンス、学生主催イベント、ビンゴ大会が行われました。また模擬店コーナー、農業大学校による農産物販売、小学生ものづくり体験塾のブースが準備され、来場者をもてなしました。どのブースもたくさんの方が集まる人気ぶりでした。会場では、実行委員・職員に加えて農業大学校の学生の皆さんが、連携協力をしながら学園祭を運営していました。



文部科学大臣表彰！！

山梨市立後屋敷小学校



後屋敷小学校は読書活動が盛んです。1年間に読む本は1人平均100冊、上級生の児童が下級生の児童に本の読み聞かせをする「にこにこ読書」や図書委員会の活動が評価され、今年度「子どもの読書活動優秀実践校」として文部科学大臣表彰を受賞しました。その活動の一環として、11月26日(水)に読書集会が開催されました。集会は図書委員が中心となって企画・運営されています。今回は、まず『ポプラディア』という児童向けの百科事典の使い方について、調べたい項目の見つけ方を、模造紙に描いた図を交えながら図書委員が説明しました。続いて、図書室から100冊以上の本を借りている多読者34名の紹介や『あらしのよるに』の読み聞かせが模造紙に描いたオオカミとヤギの絵を使いながら行われました。聞く立場の児童も話し手を見て真剣に集中して聞いている姿が印象的でした。



『ポプラディア』という児童向けの百科事典の使い方について、調べたい項目の見つけ方を、模造紙に描いた図を交えながら図書委員が説明しました。続いて、図書室から100冊以上の本を借りている多読者34名の紹介や『あらしのよるに』の読み聞かせが模造紙に描いたオオカミとヤギの絵を使いながら行われました。聞く立場の児童も話し手を見て真剣に集中して聞いている姿が印象的でした。

先生方やPTAの皆さんの活動

学力向上のための講演会

山梨市教育委員会・山梨市学力向上推進委員会

8月8日(木)、山梨市民会館に山梨市内小中学校の全ての先生方が集まり、令和元年度山梨市「学力向上のための講演会」が開催されました。講師の福島県新地町教育委員会指導主事・千葉正俊先生からは「教育効果の最大化を図る新地町ICT活用教育の取組について」と題して、最先端をいく新地町のICT活用の様子や、子どもたちの学力向上と深い学びにつなげるための効果的な手法や手立てが示されました。先生方は猛暑をものともせず、熱心に耳を傾け、積極的に講演に参加されていました。ICT教育への情熱とこれからの方向性を感じられた研修会でした。



甲州市「確かな学力」育成プロジェクト～授業研究会～

塩山南小・甲州市教育委員会

10月11日(金)、塩山南小学校体育館において甲州市「確かな学力」育成プロジェクト～授業研究会～が開かれました。保坂教育長はじめ市内小中学校の全教職員が集まる中、初めに筑波大学附属小学校教諭 盛山隆雄先生による提案授業が行われました。先生は「等積変形を通して図形の見方を深める面積の導入授業について考える」という視点で授業を進めていきました。



授業に引き続き、授業研究会として各学校ごとに「算数、数学科的における主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」のテーマで協議を行い、その後、質疑応答が活発に行われました。最後に盛山先生が本時のポイント等に関する講演をし、授業研究会を終えました。参加した先生方は、今後の授業に生かそうと、熱心に先生の話しに耳を傾けていました。

笛吹市PTA連合会研修会

笛吹市PTA連合会では、PTA研修会として10月5日(土)、いちのみや桃の里ふれあい文化館において映画「がんばれ まあちゃん」を上映しました。この映画は、教育映画祭優秀作品賞を受賞した作品で、耳の聞こえない「まあちゃん」とおばあちゃんの心温まる心のふれあいと家族愛を描いた映画です。



会場に集まった約120名の参加者にとって、家族愛やささしさ、思いやる心の大切さを考えるひとときになったと同時にきっかけにもなったと感じました。会の終了後、参加者たちは、感動と充実感を得て会場を後にしていました。

笛吹市PTA連合会



長田由布紀さんの講演会

10月17日(木)に山梨高校でPTA研修会が開催されました。このPTA研修会は、山梨高校の保護者、職員のみならず、東山梨地域の高校の保護者、職員も出席可能な研修会で、日川高校、塩山高校からも関係者が参加しました。研修会では、臨床心理士、公認心理師で、山梨高校のスクーカウンセラーである長田由布紀さんによる「高校生の心のそだちと親子関係～大人になる心の不思議～」と題した講演会が行われました。講演では、まず高校時代は大人になる練習と準備として「自立と自律」「親離れと友人関係」「アイデンティティを模索」と

山梨県立山梨高校PTA



いう3つの重要な要素があると説明されました。例えば「親離れと友人関係」では、自立するために友人は大切であることや発達段階ごとに親と子に対して友人や自我理想する人物がいろいろな立場で関係をしているとのことでした。その中で、子が自分で友人を作るエネルギーは10歳になる前に形成され、友達ができないことがあったら、高校生になってからでも親の経験を話すことなど徹底的に会話する時間を作る必要があるといった興味深い内容でした。最後に、「小さい頃やっておけばよかったと思うことは、そのための時間を今からでも作るべきで、高校生がラストチャンスです。」と話された言葉が印象に残りました。



思いを胸に…

11月14日(木)午後6時30分に甲州市民文化会館で青少年育成甲州市民会議が開催されました。まずはじめに「家庭の日」「青少年を育む日」啓発作品の表彰式が行われ、続いて市長賞を受賞した作文の発表がありました。小学生1名、中学生1名がそれぞれ発表を行いました。2人の作文に共通していたのは、自分の思いと確固たる意志が入っているところでした。発表態度も堂々としており、はきはきしていました。子どもの成長はすばらしいと思いました。その後、イベント・まち事業企画(株)鶴興社代表の

青少年育成甲州市民会議



鶴田真也氏による「無いなら作ろう」という講演会が行われました。地域を大事にしながら自立できる地域にしたいという目標を持って事業を行っている鶴田さんの前向きでバイタリティーあふれる生き方に勇気をいただきました。



地域の子どもを見守り育てる(大会宣言より) 山梨市子供・若者育成支援推進大会実行委員会

11月17日(日)、山梨市子供・若者育成支援推進大会が山梨市民会館で開催されました。大会では、「家庭の日」啓発作文コンクール優秀作品15名の表彰が行われ、4・5・6年生の最優秀作品が朗読されました。「がんばるお父さん」「生き物から学んだ事」「家族のきつな」と、それぞれが家族を繋ぐ思い入れのあるものを取り上げながら、家族への想いを語りました。また、少年の主張山梨県大会の優秀賞(中学3年生2名)も朗読されました。それぞれ「国際化社会に向けて」「人の心に寄り添う社会」についてを語りました。記念講演ではNPO法人企業教育研究会事務局員の市野啓介氏による「みんなで考えよう、スマートフォン」と題した講演が行われ、スマホ依存症、SNSによるいじめ問題や犯罪に巻き込まれないようにすることなどについて学びました。



八代・芦川・境川地域課題研究会議

笛吹市教育協議会

11月6日(水) 笛吹市教育協議会主催の「八代・芦川・境川地域課題研究会議」が、境川小学校、芦川小学校で開催されました。境川小学校の交流授業では、1年生の国語「かん字のはなし」では、漢字のなりたちについて学びました。3年生の社会「昔の道具とくらし」では、かつて家庭で使われていたもの道具の名称や使い方について発表しました。4年生の算数「およその数」では、10万の位の数、切り捨てたり繰り上げたりして、およその数を答え、またなぜそうなるのか説明をしました。6年生の算数「比例をくわしく調べよう」では、1枚の紙の重さから200枚分の紙を数えず比例計算を使って重さで求め、最後に全員で紙を数えてほぼ200枚であることを確認しました。ICTを駆使するなど工夫した授業があったり、児童が積極的に手を挙げる雰囲気があり、クラスの一体感も感じました。



交流授業の終了後には、交流会がもたれ、学習規律、学力向上、生活習慣、情報機器などについての意見交換がされました。

山梨ことぶき勸学院【峡東教室】令和2年度学生募集

10月18日(金)に第33回勸学院祭がYCC県民文化ホールで開催され、峡東教室は、1年生と2年生27名が「なんちゃってミュージカル『焼け山峠の子受け地蔵』」を甲州弁の台詞による演技に「時代」「日本昔話」「翼をください」などの合唱を交え披露しました。発表が終わった瞬間、会場からは大きな拍手が巻き起こり、「すごい!」「ここだけの披露ではもったいない。」といった声もきかれました。



勸学院では文学、歴史、社会、経済、環境、健康など幅広く学ぶことができます。授業は年間25回(原則金曜日・半日)、主に東山梨合同庁舎(甲州市塩山上塩後)で行われますが、峡東地域の県立施設などで行われる訪問研修もあります。また入学式、勸学院祭、卒業式はYCC県民文化ホールで行われます。峡東教室の学生のみなさんは、和気藹々とした雰囲気の中で、楽しく、元気に受講しています。



まもなく、令和2年度の学生募集が始まります。募集要項は1月中旬から、市町村の教育委員会、東山梨合同庁舎内の峡東教育事務所、山梨ことぶき勸学院(甲州市東光寺)等で配布する他、山梨県のホームページからもダウンロードできます。出願期間は、令和2年2月3日~3月16日です。人生100年時代を迎え、ことぶき勸学院で新たな出会いや知識を学び人生を豊かにしてみませんか。



山梨ことぶき勸学院(峡東教室)では、令和2年度入学生を募集します。詳しくは下のQRコードからホームページをご覧ください。下記にお電話でお問い合わせください。

【問い合わせ先】
山梨ことぶき勸学院
(峡東教室担当:堀井)
Tel.055-233-6947
甲州市東光寺2-25-1

